

/ʃ/が語る音変化史

—カムチベット語香格里拉方言群における硬口蓋系列音素についての覚え書き—

鈴木 博之

オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Sems-kyi-nyila 方言群、有声硬口蓋閉鎖音、音変化

1 はじめに

チベット系諸言語 (Tibetic languages; Tournadre 2014) の中で、中国雲南省北西部を中心に分布するカムチベット語 Sems-kyi-nyila (香格里拉) 方言群の諸方言の中には、前部硬口蓋系列と硬口蓋系列の間に対立を形成する方言がある。たとえば、/t, d/と/c, ʃ/の間、/ɕ, z/と/ɕ, j/の間、/ɲ/と/p/の間に対立を形成したりするといった具合である (鈴木 (2010a), Suzuki (2016) ; 音表記の方法は鈴木 (2005)、朱曉農 (2010) を参照)。これらの対立は、各方言について、ほぼ明確な形でチベット文語 (以下「藏文」) 形式との対応関係を見出すことができ、音対応の観点から整理ができる特徴であるが、その対応の仕方の方言差が非常に大きいため、調査地点の間隔を狭くして、具体的には自然村単位で調査を行わなければ全体像がつかめないばかりか、音変化の観点から明確な説明を与えることもまた困難である。

1.1 Sems-kyi-nyila 方言群の下位分類

Sems-kyi-nyila 方言群は現段階の分析 (鈴木 2015 ; 名称に若干の変更あり) で、次の5つの下位方言群に分類できる。

1. rGyalthang (建塘) 下位方言群
2. 雲嶺山脈東部下位方言群
3. Melung (維西塔城) 下位方言群
4. dNgo (翁上) 下位方言群
5. Lamdo (浪都) 下位方言群

そのうち本稿で議論するのは rGyalthang 下位方言群と雲嶺山脈東部下位方言群の一部の方言である。その他の下位方言群についても、必要な場合に触れる。各種方言の地理的分布については、末尾の付録を参照。

1.2 議論の対象となる現象

先に示した下位方言分類のうち、rGyalthang 下位方言群における前部硬口蓋系列と硬口蓋系列に関する音体系とその方言間の変遷については、鈴木 (2015) に示したように、一応の整理がついているものと考えて差し支えない。鈴木 (2015) の分析方法は、西田 (1987) などに指摘があるように、口語形式と蔵文形式の対応関係を単一の音素と文字という関係ではなく、一定の音体系の中で体系的にとらえるものである。rGyalthang 下位方言群の当該調音位置における阻害音に限った蔵文との主要な対応関係については、代表的なものとして以下の3つのタイプが認められ、それぞれ第1類、第2類、第3類と呼ぶ。

	蔵文 Kr	蔵文 Ky	蔵文 Pr	蔵文 Py
第1類	/c ^h , c, j/	/tɕ ^h , tɕ, dz/	/ç ^h , ç, j/	/ç ^h , ç, z/
第2類	/c ^h , c, j/	/tɕ ^h , tɕ, dz/	/ç ^h , ç, z/	
第3類	/tɕ ^h , tɕ, dz/		/ç ^h , ç, z/	

表中にある蔵文形式についてはおおむね以下のように説明できるが、鈴木 (2015) も述べているように、例外もあり、1つの傾向として理解される必要がある。

- 蔵文 Kr：蔵文 k, kh, g に足字 r を伴う形式を含む全ての対応形式
- 蔵文 Ky：蔵文 k, kh, g に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式
- 蔵文 Pr：蔵文 p, ph, b に足字 r を伴う形式を含む全ての対応形式
- 蔵文 Py：蔵文 p, ph, b に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式

また、以上の蔵文の配列と表内の音素の配列は関係がない。ここで注目する必要があるのは単に調音位置と閉鎖・破擦・摩擦の別のみである。有声性・有気性についてはそれぞれ複雑な対応関係があるが、本稿では直接的に関連しないため、説明を割愛する。詳細は格桑居冕・格桑央京 (2002:271-280) などを参照。

以上のうち、第1類の共時的記述には鈴木 (2014a) が、第2類の共時的記述には鈴木 (2011) が、第3類の共時的記述には Hongladarom (1996)、Wang (1996)、《雲南省誌》編纂委員会 (1998:421-441) などがある。

1.3 具体的な問題点

上表のように整理してみるとわかるように、rGyalthang 下位方言群では音変化の相対年代の差異が方言間において共時的に認められ、音対応の複雑さから、第1類がもっとも古く、次いで第2類があり、最も変化の進んでいるのが第3類となる。そして第2類について、前部硬口蓋系列と硬口蓋系列の対立を閉鎖を伴うもの（閉鎖音と破擦音）と閉鎖を伴わないもの（摩擦音）の間で、硬口蓋系列が前部硬口蓋系列に合流する時期にずれが認められると理解できる。

ここで生じる1つの問題はこのずれの起こり方で、摩擦音のほうが音声学的に先に合流したことに対して説明をいかに与えられるかということである。論点を言い換えると、閉鎖音と破擦音が摩擦音よりも先に合流する事例は存在しないのか、ということにもなる。鈴木 (2015) は

この点について何の言及もしていない。rGyalthang 下位方言群の中にそのような事例が発見されていないからである。ところが、雲嶺山脈東部下位方言群に所属する方言の中には、確かにこのような音体系を示す方言が存在することが、筆者の最近の調査で分かってきた。

本稿では、先に示した3種類の蔵文の音対応の中で、第2類は合流のタイプによって以下のように2種類 A/B に分かれることを示す。

	蔵文 Kr	蔵文 Ky	蔵文 Pr	蔵文 Py
第2類 A	/c ^h , c, j/	/tɕ ^h , tɕ, dz/	/ç ^h , ç, z/	
第2類 B	/tɕ ^h , tɕ, dz/		/ç ^h , ç, j/	/ç ^h , ç, z/

加えて、第2類 B の方言には硬口蓋閉鎖音に/j/だけが認められるものがあり、その音変化も考察する。また、A/B としているように、A と B の音変化は独立して起きたもので、互いの変化の順序を考える必要はなく、ともに第1類と第3類の間に位置づけられることも示す。

2 Sems-kyi-nyila 方言群の各種方言の子音音素一覧

ここでは、本稿で取り上げる問題にかかわる4つの方言の子音音素一覧を提示する。配列としては、硬口蓋系列について、複雑なものから順に掲げる。

なお、以下では簡潔な提示を目的とするため、それぞれの音表記について補注を加えない。筆者の音表記の方法は基本的にすべてのチベット系諸言語に共通である。音表記の提示に先立ち、本節の理解に必要な説明を述べる。

筆者の採用する音表記は Tournadre & Suzuki (forthcoming) に言及される *pandialectal phonetic description* に基づき、国際音声字母 (IPA) で規定されるもののほか、朱曉農 (2010) で明確に定義される主に中国で使用されている音声記号も用いる。

本稿において特に注意すべきは、本来分けるべき調音位置である「前部硬口蓋」と「硬口蓋」を、「硬口蓋」の下位区分として「前」、「後」と表示している点である。これらは *pandialectal phonetic description* において、それぞれ *prepalatal* と *palatal* に当たる。この点をめぐる調音位置と音標文字の定義は朱曉農 (2010) に従っている。「硬口蓋・後」は後部硬口蓋を指しているのではない点に注意が必要である。

また、/r, ɾ/ は IPA および朱曉農 (2010) に規定される音標文字の用法とは異なり、/r/ ならば、文字通りふるえ音 [r] のほか、[r, ɾ] といったさまざまな音声実現を含み、すべて自由変異であるため、/r/ によって代表させざるをえない。これは *pandialectal phonetic description* の規定である。本稿で扱う方言は /r/ は /z/ と対立するため、/r/ は [z] を含みえないが、両者が対立を形成しない方言においては /r/ は [z] を含むうる。

なお、本稿で言及する諸方言の超分節音素は語声調によって実現し、表記の際には以下の符号を語頭に置くことで表示する。

ˉ : 高平

ˊ : 上昇

ˋ : 下降

ˆ : 上昇下降

加えて、以降の例語には蔵文形式を Wylie 転写で添える。

2.1 Khrezhag (開香) 方言：雲嶺山脈東部下位方言群

Khrezhag 方言は香格里拉市尼西郷幸福行政村開香自然村で話される。この方言は硬口蓋音系列に閉鎖音、摩擦音、鼻音、半母音が認められる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		c ^h	k ^h	
	無声無気	p	t	t		c	k	ʔ
	有声	b	d	d̥		ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h	tʂ ^h	tɕ ^h			
	無声無気		ts	tʂ	tɕ			
	有声		dz	dʒ	dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ʂ ^h	ɕ ^h	ç ^h	x ^h	
	無声無気		s	ʂ	ɕ	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʒ	ʝ	ɣ	f
鼻音	有声	m	n	ɳ	ɳ	ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥		ŋ̥	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音	有声	w				j		

以上に示した子音体系は、Sems-kyi-nyila 方言群の中でもっとも複雑なもの1つに数えられる。

半母音を除く硬口蓋（前・後）音の具体例を以下に掲げる。

前部硬口蓋	硬口蓋
	ʰc ^h aʔ 「血」 <i>khrag</i>
	˦co 「小麦」 <i>gro</i>
	ʰɲɛ: 「米」 <i>'bras</i>
˦tɕ ^h õ 「家」 <i>khyim</i>	
˦tɕõ 「壁」 <i>gyang</i>	
ʰdʒa 「漢族」 <i>rgya</i>	
˦ɕ ^h eʔ 「半分」 <i>phyed</i>	ʰç ^h e ^h ku 「細い」 <i>phra</i>
˦çõ k ^h u 「狼」 <i>spyang khi</i>	˦çõ ta 「胸」 <i>brang</i>
ʰzõ 「学ぶ」 <i>sbyang</i>	ʰjõ 「砂糖」 <i>sbrang</i>
ʰna 「魚」 <i>nya</i>	ʰnə 「めすヤク」 <i>'bri</i>

2.2 rTswamarteng (祖莫頂) 方言：雲嶺山脈東部下位方言群

rTswamarteng 方言は香格里拉市尼西郷幸福行政村祖莫頂自然村で話される。この方言は硬口蓋音系列に有声閉鎖音、摩擦音、鼻音、半母音が認められる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h			k ^h	
	無声無気	p	t	t			k	ʔ
	有声	b	d	d̥		ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h	tʂ ^h	tɕ ^h			
	無声無気		ts	tʂ	tɕ			
	有声		dz	dʒ	dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ʂ ^h	ɕ ^h	ç ^h	x ^h	
	無声無気		s	ʂ	ɕ	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʒ	ʝ	ɣ	f
鼻音	有声	m	n		ɱ	ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɱ̥		ŋ̥	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音	有声	w				j		

半母音を除く硬口蓋（前・後）音の具体例を以下に掲げる。

前部硬口蓋	硬口蓋
	ʰɟʊʔ 「雷」 <i>'brug</i>
ʰtɕ ^h ɑʔ 「血」 <i>khrag</i>	
ʰtɕõ 「壁」 <i>gyang</i>	
ʰ ^f dza 「漢族」 <i>rgya</i>	
ʰɕ ^h ə 「開ける」 <i>phye</i>	ʰç ^h ə ^h ku 「細い」 <i>phra</i>
ʰɕa 「鶏」 <i>bya</i>	ʰçɑʔ 「崖」 <i>brag</i>
ʰ ^f zõ 「学ぶ」 <i>sbyang</i>	ʰ ^f jõ ^h tsə 「ミツバチ」 <i>sbrang rtsi</i>
ʰna 「魚」 <i>nya</i>	ʰjə 「めすヤク」 <i>'bri</i>

/j/については、前鼻音を伴って現れる点に注意が必要である。これが続く節で議論する要となる。

2.3 Gyennyemphel (吉念批) 方言：rGyalthang 下位方言群

Gyennyemphel 方言は香格里拉市小中甸郷聯合行政村吉念批自然村で話される。この方言は硬口蓋音系列に閉鎖音、鼻音、半母音が認められる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		c ^h	k ^h	
	無声無気	p	t	t		c	k	ʔ
	有声	b	d	d̥		ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h	tʂ ^h	tɕ ^h			
	無声無気		ts	tʂ	tɕ			
	有声		dz	dʒ	dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ʂ ^h	ɕ ^h		x ^h	
	無声無気		s	ʂ	ɕ		x	h
	有声		z	ʒ	ʒ		ɣ	f
鼻音	有声	m	n		ɲ		ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̥		ŋ̥	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音	有声	w				j		

半母音を除く硬口蓋（前・後）音の具体例を以下に掲げる。

前部硬口蓋	硬口蓋
	ʰc ^h aʔ 「血」 <i>khrag</i>
	ʰcə dʒɔ̃ 「ナイフ」 <i>gri chung</i>
	ʰɲɔʔ 「雷」 <i>'brug</i>
ʰtɕ ^h ö 「家」 <i>khyim</i>	
ʰtɕwo: 「酸っぱい」 <i>skyur mo</i>	
ʰi dza 「漢族」 <i>rgya</i>	
ʰɕ ^h uʔ 「方向」 <i>phyogs</i>	
ʰɕa 「鶏」 <i>bya</i>	
ʰzə 「暖かい季節」 <i>dbyar</i>	
ʰɲa 「魚」 <i>nya</i>	

2.4 mTshomgolung (錯古龍) 方言：rGyalthang 下位方言群

mTshomgolung 方言は香格里拉市建塘鎮錯古龍自然村で話される。この方言は硬口蓋音系列に半母音しか認められない。Sems-kyi-nyila 方言群の中でもっとも単純な子音体系をもつ。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
						前	後	
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h			k ^h	
	無声無気	p	t	t			k	?
	有声	b	d	ɖ			g	
破擦音	無声有気	ts ^h		tɕ ^h	tɕ ^h			
	無声無気	ts		tɕ	tɕ			
	有声	dz		ɖʑ	ɖʑ			
摩擦音	無声有気	s ^h		ɕ ^h	ɕ ^h	x ^h		
	無声無気	s		ɕ	ɕ	x	h	
	有声	z		ʑ	ʑ	ɣ	ɦ	
鼻音	有声	m	n			ɱ	ŋ	
	無声	m̥	n̥			ɱ̥	ŋ̥	
流音	有声	l		r				
	無声	l̥		r̥				
半母音	有声	w			j			

mTshomgolung 方言は硬口蓋（前・後）の対立が成立しない言語であるため、ここでは例を省略する。

2.5 そのほか

ここまで4つの方言の事例について見たが、前部硬口蓋と硬口蓋の間で閉鎖音どうしまたは破擦音どうしの対立が成立する例が認められない。これは音声学的な理由で存在しえないのではなく、他の下位方言群には対立する例が認められる。Sems-kyi-nyila 方言群の内部もしくはその分布地域の近隣（雲南省内）で話される言語について見てみると、閉鎖音については Lamdo (浪都) 方言 (Lamdo 下位方言群；鈴木 2010b) に、破擦音については Bodgrong (丙中洛) 方言 (雲嶺山脈西部下位方言群；鈴木 2014b) に、それぞれ次の対立が認められる。

Lamdo 方言		Bodgrong 方言	
前部硬口蓋	硬口蓋	前部硬口蓋	硬口蓋
t ^h	c ^h	tɕ ^h	cɕ ^h
t	c	tɕ	cɕ
ɖ	ʑ	ɖʑ	ʑj

以上、雲南省で話されるカムチベット語諸方言は、硬口蓋部での調音がいかに多様であるかが分かる。

3 各種硬口蓋音の蔵文との対応関係

3.1 対応関係の類型について

先に各種方言の子音体系を概観したが、共時的な音体系を見ただけでは、最初に提示した各種類型の全容を理解するということにはならない。ここでは、2節に掲げた方言の形式と、4種の蔵文形式との対比を行う。

蔵文	語義	Khrezhag	rTswamarteng	Gyennyemphel	mTshomgolung
<i>khrag</i>	血	ʰcʰaʔ	ʰtɕʰaʔ	ʰcʰaʔ	ʰtɕʰaʔ
<i>skrag</i>	怖がる	ʰcaʔ	ʰtɕaʔ	ʰcaʔ	ʰtɕaʔ
<i>khyod</i>	あなた	ʰtɕʰuʔ	ʰtɕʰuʔ	ʰtɕʰuʔ	ʰtɕʰuʔ
<i>gyang</i>	壁	ʰtɕɔ̃	ʰtɕɔ̃	ʰtɕɔ̃	ʰtɕɔ̃
<i>phra bo</i>	細い	ʰcʰe ʰkuu	ʰcʰə ʰkuu	ʰcʰə ʰtsi	ʰcʰe ri
<i>brag</i>	がけ	ʰcaʔ	ʰcaʔ	ʰcaʔ	ʰcaʔ
<i>phye</i>	開ける	ʰcʰə	ʰcʰə	ʰcʰə	ʰcʰə
<i>bya</i>	鶏	ʰca	ʰca	ʰca	ʰca

以上の基本的な対応関係は、鈴木 (2015) で示した分類と照らしてみると、Khrezhag 方言は第1類、Gyennyemphel 方言は第2類、mTshomgolung 方言は第3類に属するといえる。rTswamarteng 方言の類型は鈴木 (2015) には言及されていないパターンである。これを第2類 B とし、Gyennyemphel 方言の事例を第2類 A とすると、以下のように整理できる。

	蔵文 Kr	蔵文 Ky	蔵文 Pr	蔵文 Py
第2類 A	/cʰ, c, j/	/tɕʰ, tɕ, dz/	/cʰ, c, z/	
第2類 B	/tɕʰ, tɕ, dz/		/cʰ, c, j/	/cʰ, c, z/

上のように整理できることから、第2類 A と第2類 B の合流は重なるところがなく、独立に発生したものと考えてよい。ただし、rTswamarteng 方言のように、第2類 B に属するものの中に硬口蓋閉鎖音系列に /j/ のみが存在するという事例があることの背景を説明しなければならない。

3.2 /j/の存在について

先に述べた状況から、rTswamarteng 方言の音体系に含まれる /j/ の蔵文との対応関係に注目したい。先にふれたとおり、/j/ は前鼻音を伴う ^ʰj/ という形でのみ現れる。rTswamarteng 方言で ^ʰj/ およびそれに関連する音を含む例を、上表と同様の形で以下に整理する。

蔵文	語義	Khrezhag	rTswamarteng	Gyennyemphel	mTshomgolung
'brug	雷/龍	ʰjɔʔ	ʰjɔʔ	ʰjɔʔ	ʰdzɔʔ
'bras	米	ʰje:	ʰje:	ʰgu:	ʰgu:
'bri	めすヤク	jə	jə	jə	ʰdzə

以上のように、rTswamarteng 方言の ^ʰj/ は蔵文 'br と対応関係があるといえる。カムチベット語の他の方言を見ると、たとえば蔵文 by は前部硬口蓋摩擦音に対応するが、蔵文 'by は前鼻音

を伴う前部硬口蓋破擦音に対応するという現象があり、音対応のパターンとしては、この例と rTswamarteng 方言に見られる現象は並行しているといえる。ただし rTswamarteng 方言では硬口蓋が関係している。なお、「めすヤク」が示す例外的音対応については鈴木 (forthcoming) に詳しく述べているが、 $^h j$ の子音連続の順行同化による単鼻音化が起こっている。つまり、表面上/j/が現れていないが、この閉鎖音の調音位置が/j/の成立に必要な不可欠であるということである。第1類に属する Khrezhag 方言ではもちろんのこと、第2類 A に属する Gyennyemphel 方言においても、前鼻音つき有声硬口蓋閉鎖音 $^h j$ という音対応を認めることができるが、この方言の場合は硬口蓋閉鎖音系列が音体系に存在するため、当該形式が現れることに疑問はない。なお、「米」が示す例外的音対応については Suzuki (2012) を参照。また、視点を変えて考えると、子音連続を形成している場合に限って硬口蓋閉鎖音系列を残している方言に dNgo 下位方言群に属する Phuri 方言 (鈴木 2013) がある。この事例は音声学的に子音連続の状態にある場合には、音素の合流前の古い段階を見せることを示唆している。まとめると、第2類 B において起きているこの不均衡な硬口蓋閉鎖音の存在は、音変化の結果同一の音素/j/と認められたとしても、その蔵文との対応関係、すなわち蔵文 Kr か蔵文 Pr かによって音変化の過程に異なりが認められることを示している。蔵文 'br を独立させた音対応表を以下に示す。

	蔵文 Ky	蔵文 Kr	蔵文 'br	蔵文 Pr	蔵文 Py
第2類 A	/tʰ, tɕ, dz/	/cʰ, c, j/	$^h j$	/çʰ, ç, ʒ/	
第2類 B	/tʰ, tɕ, dz/		$^h j$	/çʰ, ç, j/	/çʰ, ç, ʒ/

第2類 A に見られる $^h j$ は、蔵文 Kr 対応形式に硬口蓋閉鎖音系列が存在するため、蔵文 'br 対応形式もまた蔵文 Kr 対応形式の音声実現と並行しているといえる。ところが第2類 B に見られる $^h j$ は、蔵文と体系的な音対応の認められる硬口蓋閉鎖音系列が前部硬口蓋破擦音に合流していると分析されるため、蔵文 'br 対応形式の調音位置は蔵文 Pr 対応形式と一致しているといえる。また、第1類の Khrezhag 方言の場合について見るならば、その音声実現が蔵文 Kr 対応形式に由来する硬口蓋閉鎖音系列と同じ音素に分析されても、それは単に音声実現が一致しているだけで、上表の第2類 A の関係になっているかどうかは断定できない。

総じて、第1類から第3類への推移として理解できる硬口蓋音系列が前部硬口蓋音系列に合流する現象において、それが音体系の推移であることは事実であるが、正確には蔵文 Kr 対応形式が蔵文 Ky 対応形式に合流するか、蔵文 Pr 対応形式が蔵文 Py 対応形式に合流するか、と述べるほうが適切である。これら2種の合流は、先に例示したように、独立して起きると考えてよいため、第2類とする音変化は第1類と第3類の中間に位置する状態を反映し、上述2種の蔵文形式の合流について、どちらか片方が先行して起きた状態を第2類と考えることができる。それゆえ、第2類には2種の下位区分に A/B を設け、互いの相対的順序を不問にすることで、その歴史的な位置を表すのが現状においては妥当であるといえる。このとき、第2類 A は rGyalthang 下位方言群を特徴づけるものであり、第2類 B は雲嶺山脈東部下位方言群を特徴づけるものである。両者の分布は地理的に互いに接しているが、それぞれ連続した一定の言語区域をもつ。A/B の分布は地理的には重なることがないという点もまた指摘しておく (末尾の付録を参照)。

以上の状況を総合して考えると、音体系の体系的変化の一部は蔵文との対応関係に強く条件づけられているといえる。そして個々の音素がどのように存在するかは共時的な体系ではなく、歴史的なある種の分類（ここでは蔵文形式）が音変化の重要な要素として作用するということを、現代の共時的な方言差異が示しているといえる。もちろん、音体系の体系的推移によって説明できる現象も当然ながらある。たとえば、第2類 A に分類される方言において、蔵文 'br だけが /^hj/ として現れる事例が複数認められる（鈴木 (2011, 2012)、Suzuki (2013) など）。第2類 A については、音体系の推移として、蔵文対応形式の不規則性を理解することができるのは確かであるが、そうでない事例すなわち第2類 B のような事例も存在することを本稿が示したことになる。

4 まとめと展望

鈴木 (2015) において、第1類～第2類～第3類の音変化は歴史的に1本の線につながっていることを示し、第1類から第2類への変化は蔵文 Pr 対応形式の蔵文 Py 対応形式への合流が蔵文 Kr 対応形式の蔵文 Ky 対応形式への合流よりも先行して起きた段階であることを示した。しかしこの関係は rTswamarteng 方言の存在によって修正を必要とし、これら2種の合流のどちらか片方が先行して起きた状態を第2類と考えることが妥当であると結論づけた。これを整理すると、以下ようになる。

	蔵文 Ky	蔵文 Kr	蔵文 'br	蔵文 Pr	蔵文 Py
第1類	/t ^h , t _ɕ , dz/	/c ^h , c, j/	/ ^h j/	/ç ^h , ç, j/	/ç ^h , ç, z/
第2類 A	/t ^h , t _ɕ , dz/	/c ^h , c, j/	/ ^h j/	/ç ^h , ç, z/	
第2類 B	/t ^h , t _ɕ , dz/		/ ^h j/	/ç ^h , ç, j/	/ç ^h , ç, z/
第3類	/t ^h , t _ɕ , dz/		/ ^h dz/	/ç ^h , ç, z/	

本稿の議論により、第2類 A/B は第1類と第3類の間に位置する独立した2つの音変化であると考えられる。また、第2類 A/B を示す方言の属するそれぞれの下位方言群に含まれる方言が共通して第1類の体系をもつことは、rGyalthang 下位方言群では Choswateng (吹亞頂) 方言（鈴木 2014a）の存在によって、雲嶺山脈東部下位方言群においては Khrezhag 方言の存在によって、それぞれ示されている。また、第1類の音対応の特徴はさまざまなチベット系諸言語の中で Sems-kyi-nyila 方言群のみが見せる特徴である（瞿靄堂、金效静 (1981)、張濟川 (1993, 2009)、江荻 (2002) などを参照)。それゆえ、第2類 A/B の分化が Sems-kyi-nyila 方言群の内部分岐であり、異なる下位方言区分を設けられる1つの言語学的根拠になるといえる。

/^hj/の存在は、音体系の推移において蔵文対応形式の観点から考えることが重要であることを示唆している。チベット系諸言語の共時的な研究においても、ほとんどの先行研究がそうであるように、一部の音特徴と音変化に関しては、常に蔵文を意識的に参照して分析する必要がある。この参照をしない限り説明のできない共時的な差異が出てくることになるだろう。またそれが本稿で扱った現象のように、細かな方言調査を通してはじめて明らかになる点もあるということを銘記しておく必要がある。

参考文献

- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23
- (2010a) 「硬口蓋調音の多様性とその表記—雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察—」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』2, 107–113
- (2010b) 「カムチベット語香格里拉県浪都 [Lamdo] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』2010-35 巻 1 号 231–264
- (2011) 「カムチベット語小中甸・吉念批 [Yangthang/Gyennyemphel] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 6 号 137–173
- (2012) 「カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴」『国立民族学博物館研究報告』2012-37 巻 1 号 53–90
- (2013) 「カムチベット語格咱/普上 [Phuri] 方言の方言特徴」『ニダバ』第 42 号 60–69
- (2014a) 「カムチベット語香格里拉県小中甸郷吹亞頂 [Choswateng] 方言の音声分析と語彙：rGyalthag 下位方言群における方言差異に関する考察を添えて」『国立民族学博物館研究報告』2014-39 巻 1 号 45–122
- (2014b) 「カムチベット語丙中洛 [Bodgrong] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 9 号 153–193
- (2015) 〈建塘藏語土話研究的幾個意義〉徐建華主編《雲南藏學研究（二）》184–197
- (forthcoming) 〈香格里拉藏語亞浪話的鼻音系統〉《東方語言學》
- 西田龍雄 (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108–169 冬樹社
- Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthag Tibetan of Yunnan: a preliminary report. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 19.2, 69–92.
- Suzuki, Hiroyuki (2012) À propos du terme ‘riz’ et de l’hypothèse du groupe dialectal Sems-kyinyila en tibétain du Kham. *Revue d’études tibétaines* Vol. 23, 107–115.
- (2013) *Overview of the dialects spoken in rGyalthag from the historical perspective*. Paper presented at 13th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Ulaanbaatar)
- (2016) In defense of the prepalatal non-fricative sounds and symbols: towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10 (in press)
- Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105–129, Walter de Gruyter.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan*. (with collaboration of Konchok Gyatsho and Xavier Becker)
- Wang, Xiaosong (1996) Prolegomenon to Rgyalthag Tibetan phonology. *Linguistics of the*

Tibeto-Burman Area 19.2, 55–67.

江荻 (2002) 《藏語語音史研究》民族出版社

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社

瞿霽堂、金效静 (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第3期 76–84

《雲南省誌》編纂委員會 (1998) 《雲南省誌 卷五十九 少數民族語言文字誌》雲南民族出版社

張濟川 (1993) 〈藏語方言分類管見〉戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297–309 中央民族學院出版社

—— (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社

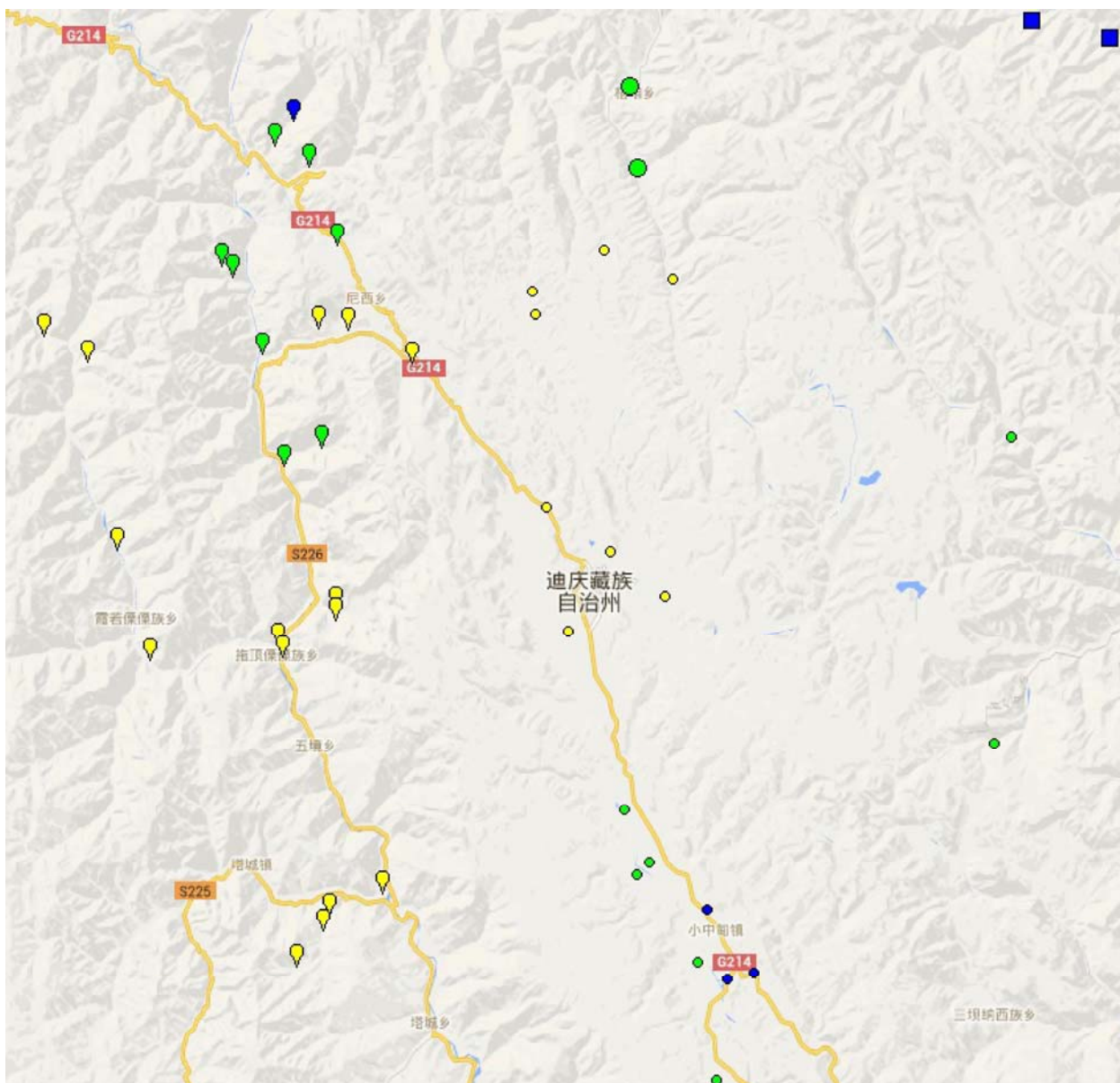
朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

[付記]

筆者による各種言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001、平成 16-20 年度)
- 日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費、平成 19-21 年度) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007、平成 21-23 年度)
- 日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) 「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」(研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167、平成 25-27 年度)
- 雲南省民族學會藏族研究委員會《雲南藏語誌》計劃 (2015 年)

付録：rGyalthang 下位方言群および雲嶺山脈東部下位方言群方言の分布図



凡例

	rGyalthang 下位方言群	雲嶺山脈東部下位方言群
第1類	●	●
第2類 A	●	
第2類 B		●
第3類	●	●

dNgo 下位方言群 ●

Lamdo 下位方言群 ■

この地図は <http://ktgis.net/gcode/lonlatmapping.html> の Geocoding によって作成した。中国雲南省迪慶藏族自治州香格里拉市建塘鎮を中心とする一帯を示す。